

日本における学術図書出版点数の定量的分析

Quantitative Analysis for Scholarly Books
Published in Japan

武者小路 澄子
Sumiko Mushakoji

Résumé

The purpose of this paper is to analyze how many "scholarly books" are published annually in Japan. Quantitative analysis for the situation of information generation and dissemination through media, concerning with the information flow in the academic fields, is essential for considering the structures and functions of information media. As far as the scholarly book is considered, its definition is still unsettled. First of all it is necessary to state the function and content of scholarly books, and to know its substantiality.

Examining the previous ideas, it seems to be most reasonable to consider the scholarly book from the point of view of its functions and contents. In this paper, scholarly book is defined as a "book that publishes the original research works".

Following this definition, the research for the amount of scholarly books published in a year was carried out. The research procedures were the following (1)-(3).

- (1) Random sampling of 1,000 book records from JAPAN MARC book records
- (2) Subtraction of the non-scholarly books, seeing the bibliographic data
- (3) Subtraction of the non-scholarly books, checking the prefaces, epilogues, citations, references, etc. of each book

The final "scholarly books" were judged and selected, using the derived data from (1)-(3). (245 books were selected for (2), 108 books for the final result). Finally the amount of annually published scholarly books were estimated, with their percentage of the whole amount of annual published books. Some characteristics of the scholarly book was discussed by this result.

In analyzing scholarly books, one always needs to judge the existence of the original research works in a medium and think about the function of books as information media. Consequentially the qualitative approach has been taken up to progress in this research.

武者小路澄子：慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻修士課程，東京都港区三田2-15-45
Sumiko Mushakoji: School of Library and Information Science, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo.

日本における学術図書出版点数の定量的分析

- I. はじめに
- II. 学術図書の範囲
- III. 調査方法
- IV. 結果と考察
 - A. 学術図書の識別
 - B. 学術図書の分析
- V. おわりに

I. はじめに

学術情報の伝達過程を把握する上で、情報メディアを捉えて考察していくことは、一つの現実的で有効な方法だろう。その際、あるメディアの構成や機能を抽象的なレベルで論ずるだけでなく、メディアの実態を具体的に調査してみる必要があるだろう。例えば学術情報伝達メディアとしての図書を考察する場合には、学術情報の生産者側にある著者が、学術情報伝達メディアとして図書をどのように位置づけているか、が問題になる。そして、図書の位置づけの実態を把握するために、定量的な調査が有効になってくるのである。つまり、具体的な出版量や、出版される図書の特徴が分野によってどのような相違があるか、を具体的な数として知る必要があるだろう。

この論文では、学術情報を伝達するメディアの中から図書を例に取り、「学術図書」の出版点数を定量的に分析することを試みる。日本において現在、学術図書は一年間の内にどのくらい出版されていて、どのような状況にあるのか。それを把握するのが研究の目的である。

日本に於ける学術図書の生産量の分析は、既に書誌情報をもとに調査された結果がある¹⁾。しかし、ある図書が「学術図書」として認められるのに必要な条件は、書誌情報として扱われているデータだけから、どの程度推察し得るのか。学術情報を伝達する機能を備えているか否かを完全に判断できるほど、書誌情報が図書の中身を十分に表現しているかについては、まだ疑問がある。この調査では、図書の内容が書誌情報によって十分に判断できない場合は実際の図書に一点ずつあたり、学術図書の要件を細かく識別していく手法をとって、定量的分析を行なうことを試みる。

II. 学術図書の範囲

現存する多種多様なメディアの中で、「学術図書」と

は一般にどういった機能・内容のものをさすのだろうか。既存の研究において、学術図書に関連する用語がどのような扱われ方をされ、またどのような種類のメディアをその範囲に含むのか探ってみた。

第1表は、学術図書に関連する用語を定義している文献における、定義者、用語(< >内)、定義を要約してまとめたものである。それぞれの定義が、学術図書を

- a. 機能・内容
- b. 対象読者
- c. 出版者

のうちのどの観点から定義しているかによって、分類されている。それと併せて、そこで具体的に挙げられているメディアの種類を表わした。

a. 機能・内容による定義

まず、学術図書がどのような役割を持っているものか、またそこに伝達されている情報はどのようなものか、というような、機能、および内容から学術図書を捉えようとしている定義を検討しよう。

「学術図書」という用語の定義としては、箕輪¹⁾によるものがあるが、他には一般的と言える定義はない。箕輪の定義は学術図書を機能から捉え、次のように定めたものである。

学術情報を伝達する書籍であり必ずしも学者を対象にした新知見の伝達に限定していない。生の資料としてのデータ、記録や大学レベル以上の学生向けの教科書等もその範囲に入れている。(p. 290)

一方、『図書館・情報学概論』²⁾では、学術情報メディアを扱う第四章で、図書を説明して、「オリジナルな研究成果を伝達するためのメディア」と機能から定義する。ここでは、図書というメディアは「まとまった量の研究成果が必要であり、公刊するまでにかなりの時間が

第1表 学術図書に関する定義

定 義		メディアの種類
a. 機能・内容による定義		
箕輪成男	<学術図書> 学術情報を伝達する書籍 必ずしも学者を対象にした新知見の伝達に限定しない	1) 一次文献 2) 二次文献 3) レファレンスとレビュー 4) 教科書 5) データ
『図書館・情報学概論』	(学術情報メディアとしての) <図書> オリジナルな研究成果を伝達するためのメディア	
Mikhailov	<scientific books> 科学情報の一般化 理論研究が発表され、方法論的問題を進展させる	モノグラフ、雑誌記事の編集物、 レファレンスブック、教科書と ハンドブック、政府刊行物
Mann	<学術書> 特定のテーマで著者が新しい知識領域を開拓していくもの <monograph> 本の長さを備えたオリジナルな学問の成果	
Persell	<scholarly books> 重要な問題に取り組んだり、当該分野に大きな理論的貢献をする、系統的でオリジナルな研究に基づいたもの	
Lane	<academic books> 教育用、実務用、職務用の図書よりも専門的な読者をねらう通常内容はオリジナルで、直接的に試験対策向けではないということで区別されている	
“Scholarly Communication”	<scholarly books> 価値のある学術的業績	
b. 対象読者による定義		
布川	<専門書> 研究者や専門家、あるいはその方面の高い知識を得ようとする人々を読者対象とし、ある程度の専門的な素養を必要とする内容のもの	
Machlup	<scientific and scholarly books> 専門的、学術的活動を行なう学者、科学者、学生、及び芸術と科学、もしくは文学(「純文学」)における知的関心をもつ一般読者の利用に向けられた、“serious works”と呼ばれるもの	
Neilly	<professional and scientific books> (高卒～高度なレベルの)教育を受ける人々のための出版物	実習書、教科書、参考書、 学術論文集、専門事典、 ハンドブック、データブック、 研究論文誌、モノグラフ
c. 出版者による定義		
Horowitz	<scholarly books> 学者の著作物、90%が大学出版社	

かかる」ために、科学技術分野のように速報性の要求される主題分野・領域では、現在オリジナルな研究成果が、図書の形で公表されることはほとんどない。一方、人文・社会科学分野のように速報性がそれほど強くない

い、あるいは研究成果を公表する際にまとまった量の著作を必要とする分野・領域では、オリジナルな研究成果が図書の形で公表されることも多いと述べられている。海外ではどうだろうか。academic books, scholarly

books, scientific books という用語で、この種のメディアが扱われている。しかし、これらのメディアを研究している諸文献を調べてみると、各々の用語は多様に扱われており、全体を合わせて捉えられないので、どの用語が「学術図書」と対応付けられるかは明確ではない。今のところ、「学術図書」に該当する用語は定まっておらず、多様な捉え方があると言えよう。

Mikhailov⁹⁾は、<scientific books>と呼ばれるものに、明確な定義はないと述べている。彼は、scientific book の機能は、科学情報を一般化させることである、と主張した。図書は理論研究を発表し、科学、経済、文化の方法論的問題を進展させるもので、新しい世代の科学者や専門家を教育、指導、教化するための方法として、図書に代わりうるものはないという。

機能や内容による定義の内、学術情報を一般化させる機能をもつものとして図書を位置づけた Mikhailov に対し、別の研究者は、図書には学術情報を直接的に伝達する機能も含まれると見ている。Mann⁴⁾によれば、「学術書(研究書)」¹⁾は特定のテーマで著者が新しい知識領域を開拓していくものであり、「学者が研究書を書くのは、研究の専門分野でどんな新しい進展があったかを同僚に情報として伝えるためである」と説明する。学者はほぼ習慣的に、現在の研究をまず雑誌論文や研究報告の形で発表し、次に研究成果の量がふえたときに本の形にまとめる。もちろん、こういう一般論には多くの例外があって、人文科学や、分野によっては社会科学においてさえ、すべての成果は、ほかの何よりも本の形で発表しようという明確な意図を持ち、長期計画のもとで仕事を進めている学者も珍しくない、としている。

また、Mann が *Journal of Documentation* 誌の中で述べている内容から捉えた“monograph”の定義⁶⁾も注目に値する。monograph は、「印刷された頁とハード・カバーのある伝統的な図書形態で出版され、定評のある出版社によって販売される、図書としての量を備えたオリジナルな学問の成果」と定義され、専門的研究者を対象とするものであるという。これと近い内容で、Brown⁷⁾も“scholarly monograph”を、研究者にとって有益な情報を得ることのできる学術情報を載せたものと捉え、価値のある多くの図書が、売行きを期待できないために出版できないという問題に対して、解決策を講じなければならないと考えている。

学術図書に「オリジナル」なものを求める定義は、その他にも認められた。例えば、Persell⁸⁾は、scholarly

books が「重要な問題に取り組んだり、当該分野に大きな理論的貢献をする、系統的でオリジナルな研究に基づいたもの」であると機能、および内容から定義している。Lane⁹⁾もまた、学術図書の内容が通常はオリジナルなものであると述べている。更に、学術図書を区別する際は、対象読者が教育用、実務用、職務用の図書よりも専門的であり、直接に試験対策向けではない、ということから区別できると説明し、内容と対象読者の二つの観点から学術図書を捉えている。

その他の内容から捉えた定義で、National Enquiry のレポート“Scholarly Communication”¹⁰⁾では、「価値のある学術的業績」としている。この定義の場合、scholarly books は商業出版者が請け負えるだけの広い読者層を引き付けられず、主に大学出版局が資金援助を受けて刊行されている、と出版の観点からも述べている。

b. 対象読者による定義

布川は、専門書と一般書の区分について述べる中で、専門書の中核となるのが、学術研究書や専門技術書とそれに近いものであると述べている¹¹⁾。

一般的には、学究者や専門家、あるいはその方面の高い知識を得ようとする人々を読者対象とし、ある程度の専門的な素養を必要とする内容のもの。しかし、たとえ専門の分野のものであっても、その性質や使用される向によって、例えば入門的なもの、教科書風のもの、一般書として扱われることもあって、その辺の線は必ずしも明確ではない。

学術図書は、このうち学術研究書について指摘している部分に相当し、学究者を対象としている図書であると考えてよいだろう。

Machlup¹²⁾の定義では、scientific books と scholarly books は同じものを指すという。彼の定義する学術図書、“serious work”(真面目な著作)は、2種類の対象読者を持つ。ひとつが、専門的、学術的活動を行なう学者、科学者、学生の利用に向けられた図書で、これは学術情報の直接的な伝達ということになるだろう。しかし、もう一つは芸術と科学、もしくは文学(「純文学」)研究に知的関心を持つ一般読者の利用に向けられた図書であるという。これは、Mikhailov の述べる「一般化」の機能と通ずるような、学術図書をより広範囲に捉える

考え方である。

Neilly¹³⁾の定義「教育を受ける人々のための出版物」は、professional books と scientific books を同時に扱ったものなので、学術図書よりは広範な範囲に属する図書を指すことになろう。広義には、ビジネス・科学・工学・社会科学・医学・看護学・法学において、高校を卒業程度の知識から高度なレベルの専門的訓練に要する知識の範囲にわたって、教育を受ける人々のための印刷物と定義される。このマーケットの多くは、諸機関、即ち企業、政府機関、学術図書館や専門図書館に販売されるものだという。

c. 出版者による定義

Horowitz¹⁴⁾は、学者によって著された図書は多くのカテゴリーへ位置づけられるとし、米国の出版界はそれによって活動を分けていると述べた。主なものが、次の三つである。

- (1) 商業出版物
- (2) 教科書出版物
- (3) 学術図書

(3)について、ビジネス・専門、科学、技術、医学出版として商業出版社にも見出されるが、この種の出版に関する専門知識を持たない出版社では、こうした図書は大学出版局の図書だと、みなすことも多いという。90%の学術図서가大学の出版局の手によっている事実からみて、Horowitz は、それが必ずしも間違いではないらしい、と述べている。

学術図書の定義として、先に挙げた箕輪の定義は、かなり広範囲の定義と言えよう。箕輪の調査で「学術書」として含んでいるものには、次の種類がある。

- (1) 一次文献—学者向けの新知見の発表
(本来は雑誌論文によるが、まれに単行本で一次的発表を行う場合もある。人文や社会科学で多い。また、雑誌発表の論文を集めてより大きなテーマで知見を問う型の本が多い。ここではそうした二次的な発表も研究者を対象にするから一次文献とした)
- (2) 二次文献—抄録、索引、書目等、文献発表のための道具
- (3) レファレンスとレビュー—レビュー(書籍の形で)、ハンドブック、百科事典、辞典、リーディ

ングス

- (4) 教科書、教養書
- (5) データ、史料、記録

これらのメディアの内、(2)二次資料、(3)三次資料は、オリジナルな学術情報を、そのまま伝達するものではない。(4)教科書等は学術的な内容を持つものであるが、対象読者によって、そこで扱われている学術情報が専門的なものなのか、一般的なものなのか、また情報がどの程度知識として統合された上で伝達されるのか、多様なレベルがあると思われる。その全てのレベルの図書を「学術図書」として扱ってよいだろうか。(5)のデータ類では、それ自体がオリジナルな内容を持つ情報となっているか、単に学術研究にとって参考となる素材としての機能を持つものかによって、違ってくる。

他の例でみると、Mikhailov が、科学情報活動において最も重要である図書として、次のものを挙げている。

モノグラフ、雑誌記事を編集したもの、会議資料、レファレンスブック、教科書とハンドブック、政府刊行物

また、科学情報の流れに付いて論ずる中で Subramanyam¹⁵⁾が挙げるメディアの内、

研究用のノート、日誌

私信、メモ

レター・トゥー・エディター

レター・ジャーナル

特許

プレプリント、会議資料、リプリント

テクニカル・レポート、博士論文、学位論文

雑誌記事

書誌

ハンドブック、表、ダイレクトリー、辞書

百科事典、モノグラフ、レビュー

文献案内、書誌の書誌

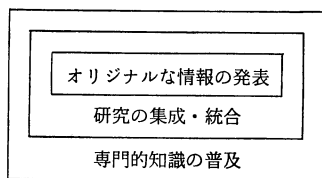
下線を引いた(著者による)メディアは、図書形態を取り得る。要するに、学術図書として思い描かれるメディアには多様な種類があり、様々なレベル、様々な観点から取り扱わなければならない。

学術情報メディアとしての学術図書は、図書形態に固有の特徴を備えているため、学術情報を伝達する上で特定の役割を持っているかも知れない。しかし、学術図書

日本における学術図書出版点数の定量的分析

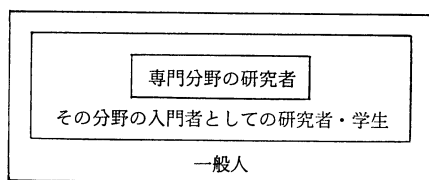
(A) 研究成果の発表の場・・・

学術図書の内容、機能からのアプローチ



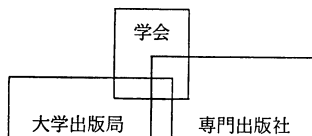
(B) 学術情報の受け手・・・

学術図書の対象読者からのアプローチ



(C) 出版元のタイプ・・・

学術図書の出版者からのアプローチ



第1図 学術情報メディアにおける学術図書の基準：アプローチの違い

の特徴として第一に考えるべきなのは、学術情報を伝達するという点である。これは、図1で言えば(A)研究成果の発表の場という観点から、学術情報メディアとしての学術図書を眺めることを意味する。もし、(B)学術情報の受け手から捉えれば、学術情報が特定の対象読者を選んで伝達されるということになる。また、(C)出版元のタイプでも同様に、学術出版社と定められた特定の出版者の手によらない図書全てが、学術情報に関わっていないことになってしまう。無論、(B)や(C)のような側面は、学術情報の流れの中で重要な役割を担うものだ。しかし、学術図書をどう位置づけるか、ということであれば、研究成果が伝達されるという機能・内容の側面を中心に据えた基準を設けて、対象読者や出版者によるアプローチは副次的に用いるようにすべきだろう。

この研究では、機能や内容によって学術図書を判断するのが最も妥当であるという立場をとることとする。そして、その観点から考察して、学術図書として定義する範囲を限定して扱っていきたい。つまり、図1(A)にある

ような、研究成果の発表の場という観点から、学術図書を限定して定義する。まず、研究成果の発表の場に含まれる範囲として、次の段階を仮定した。

- 1 オリジナルな情報の発表
- 2 研究成果の集成・統合
- 3 専門的知識の普及

研究者が、その分野における研究としてオリジナルな情報を生み出し、発表するのが1の段階である。それに対して、2は研究成果がある程度まとまったもので、一度発表するだけの短期的な研究よりは大きな枠組みを持つ持続的な研究や、全体として完結するような研究の集成、その研究者の業績としてまとめあげられるようなものを言う。この場合、既にそこに含まれている研究成果の一部が発表されていようとも、新たな観点に立ち統括的な集成・統合を行なうのであれば、オリジナルな研究成果としての価値が見出せる。最後に、その研究が分野の「専門的知識」として、関連領域・分野、他の領域・分野、そして一般の人々へと普及するのが3の段階となる。

実際の図書を1～3に振り分けるとすると、これらの境界線は厳密に定められないだろう。オリジナルな情報の発表と、研究の集成・統合の要素は明確に区別できるものではないし、専門的知識を普及するような教科書や教養書の中でも、研究者のオリジナルな情報を発表するという要素が全く入っていないとは言えない。

しかしこの研究では、学術図書の持つ「オリジナル」研究成果の発表という側面を重視する。そして、学術図書を「オリジナルな研究成果の発表されている図書」と定義する。学術情報を伝達するメディアは、「研究者の研究成果として生み出され、研究者間のコミュニケーションのために記録され、伝達される」²⁾ものとして捉えられる。その際、その研究成果がオリジナルであるということは、こうした学術情報メディアの内容・機能の本質であると考えられる。なぜなら、あるメディアで発表されている研究成果が特定の学術分野・領域にオリジナルな情報をもたらし、分野・領域に貢献することが、学術情報が伝達される最も重要な理由となっているからだ。従って、学術情報メディアの内でも、オリジナルな研究成果が発表されていない図書に関しては、学術図書の対象外とする。その結果、オリジナルな情報を発表する1の段階、および研究成果の集成・統合においてオリジナルな部分がある2の段階は学術図書と見なせるが、3の段階は実際にオリジナルな情報が存在するかによって、学術図書であるか見極める必要が出てくる。

今後、Ⅲ・Ⅳ章で現実に図書を調査・識別するときの目安として、1と2に該当する図書に関しては「学術図書」とみなし、更に周辺的な3に属するものは実際の図書にあたって「オリジナルな研究成果が発表されているか」を一冊ずつ判断していく方針を採ることとする。

Ⅲ. 調査方法

<学術図書の識別>

Ⅱ章で行なった考察をもとに、この章では学術図書の年間出版量を実際に調査し、分析を行なう。

日本における学術図書の生産量の分析は、既に箕輪成男¹⁾が行なっている。彼は『出版年鑑』所収の1979年の新刊2万7千点の事誌事項に目を通し、「学術書か非学術書か、学術書であればいかなるタイプの本かを識別し、一点一点に記号をつける」という分析方法をとった。箕輪の定量的分析は『出版年鑑』の書誌情報だけに依存し、学術図書に該当するかを推察して、振り分けていくという方法だった。

また、Mikhailov³⁾も、書誌情報を用いて世界の学術図書の出版量の推定を試みている。彼は、

- 1 異なる国々における、分野別・目的別による図書の量や流通の統計データは、比較できるものではない
- 2 世界的な規模で、scientific books の増加に関する変動を正確に描くことは今の所不可能である
- 3 ある国の総図書生産量中の scientific books の割合は、時間がたっても比較的变化らない。それ故、scientific books の増加の変動の分析は、総図書生産量の増加の分析で置き換えられるかも知れない。

と考へて、実際に、全世界、またソビエト連邦、アメリカ、ヨーロッパ諸国の学術図書出版量を算出している。その方法は、『ユネスコ文化統計年鑑』¹⁾と各国の全国書誌をもとに、年度ごとに総図書出版点数中の学術図書出版点数のおよその割合を、計算するものであった。ただ、『ユネスコ文化統計年鑑』は、統計をとる年度にばらつきがあり、統計の方法も変更されていたりする。加えて、図書の出版点数に関する統計は、各国ごとに方法が異なるために数字の表わす意味が異なっているだけでなく、必ずしも正確なものではない¹⁰⁾。故に、『ユネスコ文化統計年鑑』は、こうした分析方法に堪えるほど、一貫した統計をとっているとは考えられない。

この調査では、Ⅱ章で定義した「オリジナルな研究成

果を発表している図書」に該当するものを学術図書として識別していきたい。その範囲・条件においてできる限り正確な判断が行えるように、まず学術図書を識別するための一定の基準を設けることにした。そして、ある図書が学術図書かそうでないかは、基準を反映させるような要素を図書に探していくという方法をとった。学術図書の要件は、機能・内容を中心にして求めることにしたので、まず図書においてできる限り機能や内容を反映させる要素を明らかにし、基準を満たす要素が適切に含まれているかどうかを調査した。

このことは、図書について調査可能な諸要素の内、学術図書、即ち「オリジナルな研究成果」を発表している図書を識別する基準となるような要素が、ある程度共通に存在している、と仮定することである。学術図書として認められる図書が共有している要素とは何か。正確な識別のための決定的な要素というものがないので、調査可能な範囲の要素を組み合わせ、「オリジナルな研究成果を発表する」点をできるだけ反映させられるように絞りこんでいかなければならない。

調査にあたり、実際に調査対象とする図書を識別する要素として、以下のものが考えられる。

- (1) 書誌情報
- (2) 引用・参考文献
- (3) 前書き、後書き
- (4) 著者・共著者の経歴
- (5) 出版者のタイプ

この内(3)と(5)は、Ⅱ章で述べた、対象読者、出版者によるアプローチも含まれる。これらは、内容や機能からみた要素を補完するものとして用いた。ただし、(5)については、この調査では識別の基準として用いないで、(1)～(4)によって学術図書を識別する。そして、その結果として学術図書がどのような出版者から刊行されているかを見ることにした。なぜなら、学術図書を出版する出版者として、「学術出版社」という概念は Horowitz, Machlup などアメリカで考えられており、大学出版局や専門書出版社など出版元から学術図書が捉えられている。だが、日本の出版事情で学術図書が特定の出版者から出版されていると言えるのかは明らかではないからである。「ひとくちに学術出版といっても、その内容は多様」¹⁾であり、学術出版社について語るためには、「学術図書」の定義を築くことから始めなければならないのが実状であろう。

(2)～(4)の書誌情報以外の内容による学術図書識別で

日本における学術図書出版点数の定量的分析

は、実際の図書を一冊ずつ手に取って調査しなければならない。そのため、標本抽出した図書を対象として推定するという方法を採用することにした。最初に<識別1>で書誌情報によって識別できる範囲で、調査対象を振り分けた。次いで、<識別2>で書誌情報では調べきれなかったものを、(2)~(4)の要素を用いて調べることにした。

<標本抽出の概要>

調査対象として用いたのは、JMARC DATABASEに入力されている1985年分の収録図書である。その範囲と内容に付いて、『JAPAN/MARC マニュアル 第2版』¹⁸⁾によれば、

国立国会図書館第24条、第24の2及び第25条の規定によって、国立国会図書館に納入、寄贈、遺贈、購入、移管された国内出版物で、原則として昭和23年以降に刊行されたものを収録している。ただし、小冊子の一部、地図、音盤、逐次刊行物は現在収録していない。

一般図書、官庁刊行物、児童図書、各種資格試験関係図書、国内刊行外国語図書などが主たる収録内容で、目録記入は「日本目録規則 新版 予備版」に準拠し、これに「国立国会図書館分類表」、「日本十進分類法新訂8版」の分類番号、「国立国会図書館件名標目表第3版」などによる件名標目等が付与してある。

使用したデータベースはJMARC85で、ここに収録されている64,606 RECORDSの内、1,000 RECORDSを無作為抽出した。項目としては、以下のものを採った。

JPNO	JP NUMBER
YR	PUBLISH YEAR
GPC	GOVERNMENT PUBLISH CODE
LG	TEXT LANGUAGE
OLG	ORIGINAL LANGUAGE
TITLE	TITLE
SUBTITLE	SUBTITLE
VOLUME	VOLME
AUTHOR	AUTHOR
SORCETYPE	SOURCE TYPE
EDITION	EDITION
PLACE	PUBLISHED PLACE
PUBLISHER	PUBLISHER
PAGE	PAGE
SIZE	SIZE

SERIES	SERIES
SERIESNO	SERIES NUMBER
SU	SUB SERIES
SUBSERIESNO	SUB SERIES NUMBER
PRICE	PRICE
CONTENTS	CONTENTS
JS	KANJI SUBJECT
NDC	NDC
NDLCN	NDL CALL NUMBER

<識別1>

1,000点の標本に付いて、JMARC からとったデータを検討して、まず明かに学術図書でない判断できるものを除外した。(1)政府刊行物、(2)一般書に分けてその基準を述べる。

1) 政府刊行物

政府刊行物は、タイトル名、シリーズ名、件名からその内容を知ることができる。以下のような内容のものが含まれていた。

統計	研究(政府、委託研究所)	図書館目録
データ	史料	書目(図書・雑誌)
年報	事業概要	白書
年史	資料集成	名簿
報告書	調査概要	職員録
要覧	産業連関表	ハンドブック
命令集	要旨(学位論文の抄録)	意見書
一覧表	予算	決議書
台帳	事例集	計画書
手引	会議録	***市・町誌
要領	研究資料	説明書
研究集録		

「**の実態」「**をめざして」

「**の現状」「これからの**」

これらの内、<研究><調査概要><研究集録>だけを選び出し、残りの図書に付いては、学術図書の要件に該当しないとした。

2) 一般書

次のものは、学術図書ではないと判断した。

a. タイトルの表現から判断して、明らかに学術図書でない判断できるもの(実用、啓蒙、意見、口授・手引、入門書)

(例) 「活用***」「***のすべて」

「絵でみる***」「おもしろ***」
 「***問答***」「***早わかり」
 「***の法」「***の使い方」
 「***読本」「***紀行」
 「***散歩」「あなたの***」
 「レディス***」
 「***!!! (が含まれているもの)」

b. TITLE 中の用語から判断して、明らかに学術図書でないもの

(例) 商品名が入っているもの
 研究対象でなく実用書と判るもの、例えば
 冠婚葬祭、占い、趣味、スポーツ等の用語
 が入っているもの

c. 文芸作品類 NDCの分類番号により、小説、詩歌、等であることが判るもの

d. 二次資料 タイトルや件名により、書目・分類表・学位論文 内容の要旨及び審査結果の要旨、等であることが判るもの。但し、事典や図鑑といった、知識を体系的にまとめているものは、それ自体が研究成果として学術情報となっている場合も考えられるので、各々の内容を調査してみることにする

その他、翻訳書は日本でオリジナルに出版された図書と全く同列の扱いで、調査対象とした。図書以外のメディア(研究報告書・パンフレット・定期刊行物・学会の要旨集)と考えられるものは最初から除いた。最終的に、抽出した標本1,000点の中で、図書以外のメディアであるという問題が生じたデータは6点であった。

<識別2>

<1>の識別方法により、標本の図書1,000点から、学術図書であるか内容を見て調査する必要のある図書だけを選び出した結果、245点がその対象となった。次に、実際にそれらの図書について以下の項目を一冊ごとに調べることにした。

<学術図書の識別>で述べた、識別に用いる要素の内、(2)(3)(4)がこの調査の対象となる。これらを用いて、学術図書の定義「オリジナルな研究成果が発表されている図書」に関連する項目を拾い上げ、定義と合致する基準を満たすかを記録した。

引用・参考文献

1. 引用文献・参考文献の有無

前書き・後書き

2. 図書の内容に付いて、著者自身がどの様に述べているか
3. 資料やデータが主体となっている図書の場合それに関するオリジナルな分析・解釈が含まれているか
4. その図書が誰を対象にしているか
5. シリーズものの場合、そのシリーズが一般向けか専門向けか

著者・共著者の経歴

6. 著者共著者、もしくは監修者、訳者がどのような機関に所属しているか

引用、参考文献の有無からは、その研究の分野・領域に既に存在している先行関連研究を踏まえているか、即ち過去の研究業績の上に積み重ねていく形の「オリジナル」な部分があるか、を調べることになる。次に、前書き、後書きを調べることにし、2と3のように図書の内容自体に判断する。2は、その図書が学術研究であることがそこで言及されている場合であり、3はデータ・資料集のような図書で、それを収集・分析・解釈する編集の仕方が研究業績として認められるか、という問題である。例えば、学術的な解釈のある古典、発掘調査結果や科学データが主な部分を占めるが、それに著者自身の研究発表としての要素が加えられているもの、多量の資料に基づいた歴史上の人物・事件の研究などの場合である。4と5は、II章で述べた学術図書への対象読者によるアプローチで、その分野・領域について専門的な読者に向けたものであるかを調べて、「オリジナルな研究成果」の識別を補完する。6は、図書自体の機能・内容は扱わないが、その研究の背景・条件・環境が、学術研究の場であるかを確認する。

以上の6項目を学術図書を識別するためのデータとした。このデータを用いて、次章では標本抽出した図書中の学術図書を識別し、学術図書の出版点数を推定する。学術図書の判断基準として直接には用いないが、結果からその特徴をつかむために、次の3点を併せて調査した。

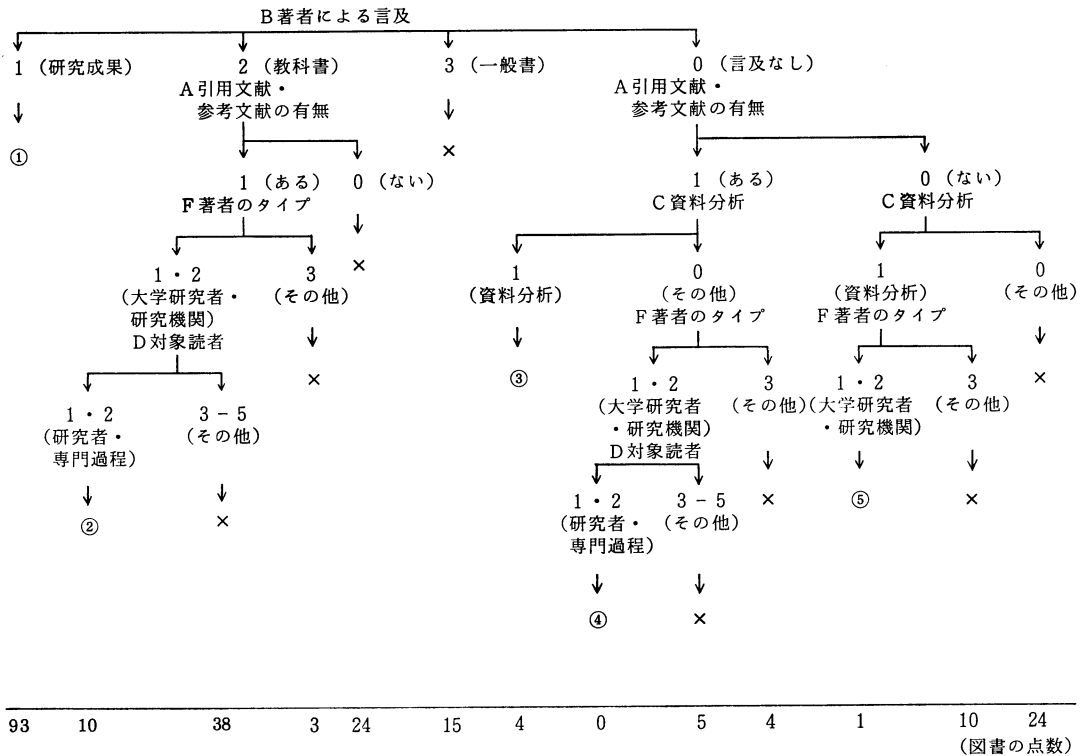
7. 一人の著者・共著者・団体組織のいずれによる発表か、また共著・団体組織の場合は全くの協同執筆か、内容で(章ごと、等に)分担しているか、それぞれが小テーマを持ち、それを集める大テーマで発表したものか
8. オリジナルに書き下ろされたものか、既に(雑誌

日本における学術図書出版点数の定量的分析

第2表 図書に関する調査項目とその結果のカテゴリー

データ	カテゴリー	データ・ソース
GC: 政府刊行物か TITLE: タイトル AUTHOR: 著者 PUBLISHER: 出版社 CONTENTS: 参考文献, 図表などの記載 NDC: NDC番号		JMARC
A 参考文献・引用文献またはそれに相当する「過去の研究業績への参照」	1 ある 2 無い	図書本文の前後, 等
B 図書内容についての著者 (著者の言及がない場合, 編者, 監修者, 翻訳者) による言及	1 研究業績として書く 2 教科書として書く 3 一般書として書く	前書き, 後書き, 等
C データ資料分析 (古典購読・発掘調査・自然科学のデータ収集・資料による歴史的人物・事件の研究が主内容)	1 該当する 0 そうでない	
D 対象読者	1 専門研究者 2 大学生 (大学院・専門過程) 3 大学生 (教養過程) 4 実務者 5 一般人 0 言及無し * 複数の対象を持つ場合, 1 → 2 → 3 → 4 → 5 の順で優先	
E シリーズ	1 一般向け 2 専門家向け 0 シリーズでない	
F 著者	1 大学研究者 2 研究機関研究者 3 その他 * 複数の著者がいる場合, 1 → 2 → 3 の順で優先 * 著者がいない場合, 編者・監修者, 等をとる	図書本文の前後, 等
G 著者の人数	1 一人 2 複数 3 団体組織 2・3の場合, 更に	
	a ある大テーマについて, 一緒に書く b 内容で (章ごと, 等) 分担 c 個々の小テーマに分担	
H 書き下ろし	1 オリジナルな, 書き下ろし 2 既に他のメディアに発表されている	
I 雑纂 (研究発表以外の随想などの文献も含む著作集)	1 該当する 2 そうでない	

- などに) 発表されたものを再編集したものか
9. 個人の著作集である場合, 研究発表以外の文献 (随想, 等) を含んでいるか
- 前書き・後書きが無かったり, 不十分な場合には, 図書の書き出しや目次を参考にして判る範囲で調べた。この1-9の項目に付いて, 図書245点を調べた後に, 各々



第2図 学術図書の識別方法、およびその結果識別された図書点数

をデータとしてデータベースを作成し、このデータから学術図書の量を分析することにした(第2表参照)。

IV. 結果と考察

A. 学術図書の識別

内容調査した図書245点のデータから、調査項目をもとに一冊ずつ学術図書を識別した。第2図は、第2表で挙げたデータをもとに、学術図書の定義に最も合致する識別方法を図式化したものである。第2図だけを見て判るように、調査項目とその結果のカテゴリーを要約した形で示してあるが、記号A-F及び各数字は第2表で詳細に説明したものと対応している。以下の(1)~(4)でその識別方法に付いて概説する。

(1) 図書内容に付いて、著者が「研究業績である」と言及している場合

この識別方法は、図書の内容に付いて、その図書を著した著者によって言及されている場合は、それを信頼することにして、識別の最優先においている。

まず、その図書について、著者自身が研究業績を発表するものであると述べている場合を取り上げる。この場合は、その図書の内容・機能は「オリジナルな研究成果を発表している」とみなして、全て学術図書として扱う。

(2) 図書内容に付いて、著者が「教科書である」と言及している場合

(1)に対して、教科書であると言及している場合、①ある学問分野や研究主題における過去の研究業績に触れていなければならない、②学術的水準が非常に高い場合に、研究者のオリジナルな研究成果が伝達される可能性が強い、として、引用文献・参考文献の有無、次いで著者のタイプや対象とする読者のタイプによって判断する。教科書であり、しかも確実に「オリジナルな研究成果を発表する図書」として置き換えることが可能なのは、その分野や領域で実際に研究を行なっている研究者が出版し、その同僚が用いている図書以外には考えられないだろう。よって、過去の業績を踏まえており、著者

が大学その他の研究機関に属し、専門研究者や大学院・専門過程の大学生のみを対象とする図書を学術図書とする。

(3) 図書内容に付いて、著者が「一般書である」と言及している場合

学術図書として「オリジナルな研究成果」を伝達しているという認識が著者にない場合は、その要件を満たしていないとして、全て除外する。従って、著者によって一般書であると言及されている図書は、全て学術図書ではないとする。

(4) 図書内容に付いて、著者の言及の無い場合

その図書がどのような内容であるのかについての記述が全くない場合は、実際の調査によって明かにできたデータだけを用いて、一律に図書を振り分けて行くという方針を取る。その際、他の場合と同じように、過去の業績を踏まえているか、または資料の分析自体が研究になっているか、そして学術的な背景がどういったものか(著者や対象読者のタイプ)を組合せ、「オリジナルな研究成果が発表されている図書」を最も反映させられるような基準を設けることにする。

その結果、(2)と同様、過去の業績を踏まえているか、で最初に振り分ける。しかし、資料を分析すること自体が研究となっている場合には、「オリジナルな研究成果」であっても、必ずしも引用文献・参考文献を備えているとは限らない。よって、次の段階で図書が資料分析を行っているものかを識別し、過去の業績を踏まえていなくても、その著者が大学・研究機関に所属しているのであれば研究成果を発表しているのだとみなすことにする。引用文献・参考文献を備えている図書に関しては、資料分析は学術図書であるとみなし、それ以外は、著者のタイプ、対象読者が、それぞれ大学・研究機関、研究者と学生(大学院・専門過程)の場合に定義と合致する図書として数える。

①～⑤が学術図書として判断できるもの、×がそれ以外の図書として識別したものである。

こうして、総サンプル数1,000点の内、<識別1>でふるいにかけられた数245点について、この方法を適用していった。但し、どうしても現物を手に取ることができなかった図書(慶応義塾大学三田情報センター、都立中央図書館、政府刊行物普及センター、東京の大手書籍店、等で現物が調べきれなかったもの)12点は除かざるをえなかった。よって残り233点に付いて識別する結果となった。その結果、合計して108点が学術図書として

識別された。それぞれの図書の点数は、図の下欄に記載している。

この識別方法によって最終的に振り分けられた図書群のデータを、それぞれ別に打ち出してみた。ここでとった識別方法がほぼ妥当なことを説明するために、それぞれの特徴を、次に述べる。

学術図書①では、『〇〇論』『☆☆史』『△△学』『◇◇著作集』、また研究主題や研究対象が示されているようなものが多く、明かに学術図書に該当しないとして除外する必要のあるものは認められなかった。『教育社会学を学ぶ人のために』というタイトルの図書があったが、この図書は、実際の前書きを見ると、入門手引だけでなく別の視点から捉え直すことでその分野の関係者にもインパクトがある研究論文集であると述べられていた。

学術図書②及び著者によって「教科書」とであると言及されたが×になったものの違いは、その教科書が過去の業績を踏まえ、研究者によって書かれたもので、学部教養課程のレベルより専門性の高い読者を持つものであるか、という点である。しかし、特に医学、教育学では、引用文献のない、実務的な方法を指導するような教科書が多かった。これらは、この調査では省いてしまっているが、医者や教師といった実務者も対象にしている高度な専門性のある教科書であり、「オリジナルな研究成果を伝達する」という要素を含んでいるかも知れない。

著者によって「一般書」と言及された図書に付いては、打ち出された図書のタイトルだけで判断すると「学術的」な印象を伝えるような図書も存在することが判明した。このことから、書誌情報だけに依存して、図書の機能や内容を判断することの不十分さが確かめられたと言えよう。

学術図書③は、クリコフ著『うそと真実』、滝川政次郎著『日本法政史』、谷邦夫著『評伝若山牧水』、ジョンソン著『エミリ・ディキンソン評伝』の4点が挙げられた。それぞれ前書き等を参照したところ、史料を分析した研究、新しい史料や新しい研究を取り入れた歴史編纂、研究者が行なった人物研究がその内容であると述べられていた。④には該当する図書がなく、⑤は岩谷浩光著『玉川村の板碑』という研究の調査報告を記録した図書であった。著者による言及がなかった図書の内、×に振り分けられたものは、一見して雑多な図書から構成されており、特徴をまとめることはできなかった。実務書、エッセイ、批評、ドキュメンタリーなどの内容の図書がその大半であるようで、「オリジナルな研究成果を

伝達する」機能を持つ図書は含まれていないと判断した。

B. 学術図書の分析

Aの「学術図書の識別」により、学術図書として識別した結果を得た。この結果を用いて、収集した学術図書108点のデータから更に明らかにすることを述べる。

a. 日本学術図書の年間出版点数の推定

JMARCのレコードから図書1,000点を無作為抽出した結果、その内の108点が学術図書として認められた。この結果をもとに、日本で出版される学術図書の量を推定する。

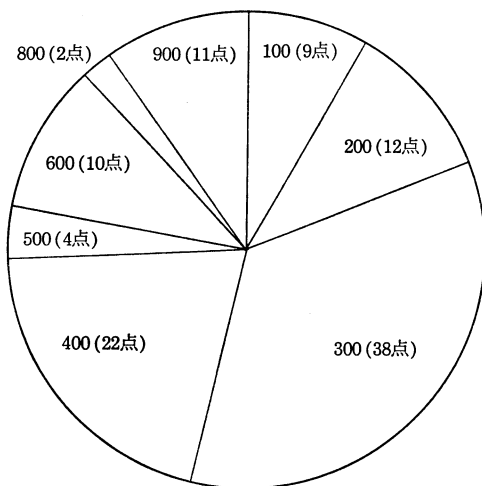
ここでは、各図書に付いて、学術図書であるか否かを問題としているのであるから、この時点で、JMARCのレコード全体を二項母集団と考えることができる。そこで、日本の学術図書の量を推定するということは、この二項母集団における学術図書の割合 p を推定することに帰着する。そこで、まず、この p の推定を試みる。

無作為標本中の、学術図書の割合を p' と書く。標本の割合が p' のとき、母集団の割合が p 、 $p_1 \sim p_2$ に入る確率を95%とする。このとき、

$$p' = 108 / 1,000 = 0.108$$

$$p_1, p_2 = \frac{2np' + (1.96)^2 \pm 1.96 \cdot 4np'(1-p') + 1.96^2}{2(n + (1.96)^2)}$$

$$P(p_1 < p < p_2) = 0.95$$



第3図 学術図書のNDC標数別の割合

である¹⁹⁾。この式にしたがって計算すると、

$$P(0.0918 < p < 0.1288)$$

となり、日本の図書出版点数の内の学術図書の割合が、0.918から0.1288にはいる確率が、95%である、と結論付けられる。

この結果をもとに、JMARCに入力された1985年分のレコード数を用いて、一年間に出版される学術図書の点数 x を推定することができる。1985年には64,606レコードが入力されているから、これを仮に一年間の図書出版点数とすると、

$$64,606 \cdot 0.0918 < x < 64,606 \cdot 0.1288$$

となる。これを計算すると、

$$5930.8308 < x < 8321.2528$$

であり、よって一年間に出版される学術図書は、だいたい5千9百冊から8千3百冊くらいであると、推定できる。そして、図書全体の内の9%から13%くらいが、学術図書として出版されている、と言うことができる。

b. 学術図書の分野別の割合の推定

NDC標数の10区分(類)に従って、学術図書108点を振り分けた内訳は、第3図の通りである。000番台(総記)・700番台(芸術・スポーツ)の図書は1点もない。

第3表 標本中の学術図書におけるNDC分類別にみた出版点数と図書中で占める割合

	図書数*	学術図書数	学術図書数／図書数 (%)
総記 (000)	43	0	0
哲学 (100)	53	9	17
歴史 (200)	105	12	11
社会科学 (300)	256	38	15
自然科学 (400)	81	22	27
工学 (500)	77	4	5
産業 (600)	95	10	11
芸術 (700)	73	0	0
語学 (800)	17	2	11
文学 (900)	156	11	7
計	956	108	

* 1,000点の図書中、NDC標数の記録されていないデータが44点存在した。そのため全体としての図書数は956点になっている。

日本における学術図書出版点数の定量的分析

全体としては、300番台（社会科学）の占める割合が、約3分の1と最も高い。ついで、400番台（自然科学）となっており、残りは、200（歴史・地理）、600（産業）、900（文学）、100（哲学・宗教）に分散している。NDC標数別の学術図書出版点数は、箕輪の調査¹⁾でも明らかにされている。10区分別の構成割合では、箕輪の調査の場合にも社会科学が最も高く(12,962点中4,265点で、約33%)、次いで自然科学(2,059点で、約16%)であったが、その他の割合は異なり、工学、芸術、文学の順に学術図書が多かった。

第3図だけでは、図書全体の中での各区分の出版点数の差が考慮されていない。そのため第3表に、標本抽出した図書中の学術図書の割合をNDC標数の10区分別に示した。分野別にみた学術図書の占める割合は、自然科学が最も高い。第3図と同様に、箕輪の調査結果と比較すると、ここでは学術図書をずっと狭義に捉えているため、総じて低い割合を示していた。しかし、学術図書が占める割合が最も高い分野が自然科学（箕輪の結果から算出すると、約94%）と一致した。その他の順位は明かに異なっていて、箕輪の結果では言語(87%)、社会科学(72%)、総記(69%)、工学(57%)であり、これは学術図書の定義の違いと調査方法の違い（全数調査と標本調査）のためであると思われる。

科学技術分野で出版される図書の大部分がテキストブックであり、人文・社会科学分野や研究成果がまとまった量の著作として公表される分野・領域ではオリジナルな研究成果が図書として発表される、といった定説²⁾は、実際のデータからある程度裏付けられた。各区分ごとにデータを分析すると、400番台の自然科学に属する図書の大半は、医学分野のもので占められていた。これらの図書は、著者によって教科書として言及されており、高度な専門性を持つために学術図書として識別したケースに当てはまっていた。

一方、300番台の社会科学、及び100番台の哲学・宗教では、研究の集成や統合、また理論研究・方法論の提示といった機能を果たしていると考えられる図書が多く見られた。それに比べて、200番台の歴史・地理には、歴史研究と人物研究（伝記）、600番台の産業では、データをもとに社会構造を分析した研究、900番台の文学では文学者・文学作品研究といったように、多様なデータや資料をもとに考察するといった研究を発表する図書が、その大部分を占めていた。

c. 学術図書の出版者

以下に、学術図書108点を出版者別に分析した結果として、2点以上を出版していた出版者を挙げることにする。参考のために、箕輪が行なった学術図書の調査¹⁾中で示されている学術図書を10点以上刊行している出版担当者（23社）に該当している出版社には＊を付し、出版点数の多さからみた順位を（ ）内に記した。

4点	医歯薬出版 講談社	
3点	朝倉書店 ＊法律文化社 国立特殊教育総合研究所 南窓社 ＊有斐閣	(7位)
2点	＊アジア経済研究所 日本経済新聞社 誠信書房 中小企業事業団中小企業大学校中小企業研究所 通信事業教育振興会 東京図書 ＊大明堂 東洋経済新報社 吉川弘文館	(13位) (22位)

学術出版社の実態が、学術図書をどの範囲で定めるかにかかっている以上、それらは「オリジナルな研究成果を発表している図書」として識別したものが、どのような出版者から出版されていたか、を示していることになる。既に第1図(C)で表わしたように、学術図書を出版する出版者としては、学会、大学出版部、出版者を想定していた。しかし、この調査結果でみる限り、政府や民間の研究所の出版物、および個人による自費出版物としても、学術図書が出版されることが判った。

いま仮に、これらの図書の出版者を、学会、協会、大学出版局、商業出版社、政府の研究機関、民間の研究機関、そして大学出版局を持たない大学の出版と個人による自費出版、というカテゴリーに振り分けてみる。その結果は、学術図書108点の出版者の内訳として、学会からが1点、協会からが2点、大学出版局からが3点、商業出版社からが81点、政府の研究機関からが14点、民間の研究機関からが4点、大学出版局を持たない大学からの出版が1点、個人による自費出版が2点である。この調査が標本調査であるため、学術図書全体の出版者の構

成について考察するには数値が低すぎるが、「オリジナルな研究成果を発表している図書」という定義に沿うように識別した図書は、学術研究のために組織された学会や高等教育機関としての大学が出版の中心舞台となっているのではなかった。学術図書の出版は、商業出版社、次いで政府や民間の研究機関の手によるものが多いということが推察できよう。

V. お わ り に

ここで行なった学術図書の出版点数を定量的に分析する方法は、あくまでも一つの方法である。同様な目的のために、他にも様々なアプローチが考えられるだろう。学術図書をどのような観点から捉え、定義して、どのような方法で図書全体の中から識別していくか、という問題に関して、確立された方法はまだ存在していない。書誌情報だけに頼らず、機能や内容にまで踏み込もうという試みが、この調査の主眼の一つであった。

調査を行ないながら、学術図書とは何かを、二つの観点から常に問い直す必要があった。一つは、図書というメディアで伝達されている学術情報をどのようにして見きわめるのか、という学術情報の内容に関する問題である。ここでは、それを「オリジナルな研究成果が発表される」ということとみなした。学術図書を識別するためには、調査対象の図書の中で図書内容についてどのように言及されているか、引用・参考文献があるか、著者が研究機関に所属しているか、など多様な要素を実際に取り上げた。そして、図書の中にはこうした要素が多様な組合せで含まれているということが発見できた。実際の調査では、その中で定義に最も合致するものを特定の基準を設けて振り分けてしまう方法をとっている。しかしながら、学術情報を伝達する図書とそうでない図書とは本来明確に分離しているということはない。最適の基準を設けて区切ってしまうことはできるが、学術図書というメディアには上で述べたような多様な要素の組合せが存在している。よって、「オリジナルな研究成果を発表する」という定義にうまく合致する学術図書があり、その周辺に基準全部を満たすことはできないが特定の側面から学術図書に非常に近い図書もある。

もう一つは、学術情報伝達の流れ全体の中で、図書というメディアをどう把握するか、学術情報メディアとしての図書の機能の問題である。図書というメディアは、

- ① 学術雑誌のように雑多な論文の集合ではなく、図書一冊にまとめた情報が、特定の読者にとっては価

値を持つように設定されている

- ② 公刊されるまでに時間がかかるが、増刷・再版されたりもするため、情報の新しさだけでなく、図書として存続していくことが重要である

- ③ 学術雑誌よりは伝達される情報に量的な制約がなく、ある程度まとまった量を同時に発表することが可能である

という特徴が挙げられる。そのため、オリジナルな研究成果を発表するという役割に加えて、図書形態によって伝達される場合には、特定の期間、特定の読者に供給されるのに十分な「完成度の高い」状態にあるとするのではない。このことは、付随的に行なった調査で、学術図書の大半が新しく書き下ろされたものであったが、17点が再編集されていたこと、8点は研究発表以外の文献も含んだ著作集としてまとめられていたことから、指摘できる。また、共著や団体・組織による執筆が半数近くを占め(52点)、その内訳も各著者が内容を分担していたり(9点)、各々が小テーマを執筆し、それを集めている(18点)ことも多く、個人単位の研究よりは大きな枠組みで、研究発表を行なっているような傾向がみられた。この事実も、図書が伝達する情報は、研究の場に即した小単位の成果を個別的に伝達すると言うよりは、ある程度まとめて完成されたものであることを示すものであろう。

こうして、「完成度の高い」学術情報を発表する場合、それが専門的な対象読者に読まれることを期待するのは勿論であるが、一般人を全く対象外としてしまうことはあまりないように思われる。オリジナルな研究成果の存在には関わりなく、対象読者をどの様に設定するかはその著者の考え次第であり、図書というメディアは広い層の利用者に供給できる可能性を持っているのではない。

この調査は、日本における学術図書の出版点数を定量的に分析することが目的であった。しかしながら、定量的分析と言っても、現実に入手可能なデータから基準に沿って計量していくという作業だけではこの目的に充分ではなく、図書というメディアの機能や学術情報を伝達するという意味をどう捉えるか、という定性的な問題について同時に考えていかなければ、結論へと達することはできない。

この調査を行なうにあたり、数々の御示唆をいただいた慶應義塾大学文学部助教授上田修一先生、調査及び考

察に関して有益なご助言をいただいた大東文化大学文学部武者小路信和先生、推定の統計的手法について御助力いただいた慶応義塾大学文学研究科図書館・情報学専攻修士課程の岸田和明さんに謝意を表したい。

- 1) 箕輪成男. 情報としての出版. 東京, 弓立社, 1984, 309p.
- 2) 武者小路信和, 三輪眞木子. 図書館・情報学概論. 津田良成編. 東京, 勁草書房, 1983, p. 96.
- 3) Mikhailov, A. I. "6 Scientific Publications and Documents". Scientific Communications and Informatics. Arlington, Va., Information Resources Press, 1984, p. 187-224.
- 4) Mann, Peter H. 本の本: イギリス出版事情. 河本仲聖ほか訳. 東京, 研究社, 1987, 241p.
- 5) 原文では, scholarly monograph とされている.
- 6) Mann, Peter H. The Publishing of Scholarly Monographs. The Journal of Documentation. Vol. 36, No. 1, p. 1-10 (1980)
- 7) Brown, Kenneth. A Systems Concept to Scholarly Publishing. Library Acquisitions: Practice and Theory, Vol. 4, p. 129-133 (1980)
- 8) Persell, Carline Hodges. "Scholars and Book Publishing". Scholarly Writing and Publishing: Issues, Problems, and Solutions. Mary Frank Fox ed. Boulder, Westview Press, 1985, p. 33-50.
- 9) Lane, Michael. Books and Publishers, Lexington, Massachusetts, Lexington Books, 1980, p. 17-20.
- 10) "3 Scholarly Books and Presses" Scholarly Communication: the Report of the National Enquiry. Baltimore, The Johns Hopkins University Press, 1979, p. 81-129.
- 11) 布川角左衛門. 出版の諸相. 東京, 日本エディタースクール出版部, 1975, p. 67-76.
- 12) Machlup, Fritz. Information through the Printed World. Vol. 1: Book Publishing. New York, Praeger Pub., 1978, 302 p.
- 13) Neilly, Andrew H., Jr. "Professional and Scientific Books". The Business of Book Publishing: Papers by Practitioners. ed. by Geiser, Elizabeth A. Boulder, Westview Press, 1984, p. 336-343.
- 14) Horowitz, Irving Louis. "8 Scholarly Communication and Academic Publishing". Communicating Ideas: the Crisis of Publishing in a Post-Industrial Society. New York, Oxford Univ. Press, 1986, p. 97-114.
- 15) Subramanyam, K. Scientific and Technical Information Resources. New York, Marcel Dekker, Inc., 1981, p. 416.
- 16) Escarpit, Robert. "統計的資料の解釈". 出版革命. 清水英夫訳. 東京, 日本エディタースクール出版部, 1979, p. 60-62.
- 17) ユネスコ. ユネスコ文化統計年鑑. 永井道雄監訳. 東京, 原書房.
- 18) 国立国会図書館. JAPAN/MARC マニュアル. 第2版. 東京, 国立国会図書館, 1985, 69p.
- 19) 日本で一年間に出版されている学術図書の数を求めるために, 次の参考図書の節で導かれている統計的手法を用いた.
岩田曉一. "7.2 2項目集団のpの推定". 経済分析のための統計的方法. 第2版. 東京, 東洋経済新報社. 1987, p. 154-156.